

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】Delakorda Tinka(デラコルダ・ティンカ)

【所属】(助成決定時)筑波大学大学院 人文社会科学研究科 哲学・思想専攻

【研究題目】ボスニア・ヘルツェゴビナの聖母出現地巡礼とツーリズム

### 【研究の目的】

民族紛争が問題となった旧ユーゴスラビアの中でも、ボスニア・ヘルツェゴビナにはセルビア正教・カトリック・イスラムが混在しており宗教間の対立が強かった地域である。本研究では、ボスニア・ヘルツェゴビナ南東部のメジュゴリエ村でおきたマリアの出現と、ここが聖地化し多数の巡礼者が集う現象を扱う。近年、ヨーロッパにおいてツーリズムとの関わりから巡礼の研究が進められており、宗教性のほかにも様々な要素が含まれていることが明らかになりつつある。本研究ではメジュゴリエへの巡礼をツーリズムとの関わりから分析し、巡礼をめぐる当地域の社会的構造について日本の事例なども念頭に置きながら考察したい。

本研究の学術的意義は、宗教学のみでは理解できないツーリズムのような世俗的要素を加味して、巡礼の構造を明らかにすることにある。一方、現代社会においてツーリズムは人々のアイデンティティを再確認させるものとして重要であると考えられており、純粋なツーリズムだけでなく宗教との関連について研究することは大きな社会的意義をもつと考えられる。

### 【研究の内容・方法】

本研究では、社会学的・人類学的な観光研究の視点から提示されてきたモデルを援用し、メジュゴリエという比較的新しいキリスト教の巡礼地に多くの巡礼者が集まる現象について考察する。聖地における活動について、「サイトの聖化」などの社会学的な観光研究の視点から提示されてきたモデルを適用することができるのだろうか。

メジュゴリエは一般的に巡礼地として認識されているが、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラやフランスのルルドのようにカトリックの正式な巡礼地としてまだ認定されていない。したがって、ここでは聖地認定のプロセスも観察することができる。例えば、巡礼者たちの行為を統制しようとするバチカン側の意向や、メジュゴリエの教会を管理するフランチェスコ会が多くの巡礼者を求める様子など、様々な動きを観察することができるのである。メジュゴリエでは現在でも定期的にマリアのメッセージが伝えられ信仰者に公開されている。これは、マリアが現在ではあらわれていない他の巡礼地と異なる特徴といえよう。

筆者は実際にバスツアーに参加し、巡礼を訪れる人びとの行動を観察することができた。メジュゴリエには世界各地から巡礼者が集まり、教会でのミサに参加するだけでなく、マリアが出現した山の頂上に集団で登拝したり、教会の周辺において懺悔をおこなっている。メジュゴリエの特徴は懺悔にあると考えられ、教会に隣接する広場や特設の建物において懺悔する姿が観察できた。現地の教会だけでは宗教的指導者数が少ないため、世界各地から主にフランチェスコ会修道士が集まり、各言語で懺悔がおこなわれる。マリアの出現が人びとの信仰心を刺激していることは確かであるが、集まってくる巡礼者に対しカトリック(バチカン)とフランチェスコ会がどのように対応するかということに焦点をあてる。フランチェスコ会はマリア信仰を基盤とする信者の獲得という点ではカトリックに貢献してきた。ただ、カトリック側はメジュゴリエのマリア出現を認めておらず、巡礼に関する指導など巡礼者が異端的にならないような努力をおこなっている。

### 【結論・考察】

通常、聖地そのものが神聖であると考えられがちであるが、観光人類学における「サイトの聖化」という概念では人々の行為によって場所に神聖さが生じるとされる。聖地があるから巡礼があるのではなく、人々の活動の結果として巡礼をとらえるのである。日本では巡礼に観光的要素が含まれることが以前から指摘されてきたが、ヨーロッパではこの視点からおこなわれた研究はまだ少ない。

近年観光社会学などが展開している、ツーリズム的営みが作り出すとされる聖地の構築という議論を念頭に置きながら、ボスニア・ヘルツェゴビナの聖母出現地メジュゴリエにおける巡礼者、メジュゴリエの教会・住民、カトリック、政府などのいくつかの活動主体を取り上げながら、聖地の構築という問題を論じるべきである。筆者の観察によれば、メジュゴリエにおいては宗教的・世俗的に複雑な社会関係が存在しており、いくつもの利害関係によって聖地としての性格が生成・維持されていることが明らかとなった。